

# 日本点字事情 かわら版

横浜市立  
盲特別支援学校  
点字研究部  
文責 道村静江

2008年1月9日発行 NO.74

## 試験問題の点字表記 その4

先生たちが正しい解答の書き方を知っておくことはもちろんのこと、生徒にも日頃から指導して熟知させておくことが大切である。

### 1. 解答の書き方と留意事項

(1) 受験番号と受験者氏名、あるいは教科名や学年・氏名など指示された項目とページ数を忘れずに書く。解答用紙が複数枚になる場合は、それらをすべての解答用紙に書く。

(2) 解答は通常行頭を2マスあけて3マス目から書く。

(3) 大問番号・小問番号・選択肢などに用いる番号・記号は、問題文に用いられている通りに使用する。

(4) 解答を選択肢の番号・記号で答える設問では、設問番号の後を1マスあけて解答を書く、設問番号に裸数字が用いられている場合には、2マスあけて解答を書く。

(5) 原則として、同一行に二つの解答は書かない。複数の解答が求められている設問で、番号・記号等の短い語で解答できる場合は、この限りではない。

(6) 真偽(×)形式では、伏せ字を使わずに、マル バツ と言葉で答える。

(7) 1問中に複数の解答が求められている場合は、解答毎に行を改める。

<例1> □□1.                      <例2> □□1. □(1)□バツ  
(1)□バツ                              □□(2)□マル  
(2)□マル                              □□(3)□バツ  
(3)□バツ

(8) 複数の選択肢解答が求められているような設問の解答の仕方には、同じ行に答えを並べてもよい。その場合、答えの間を2マスあけか1マスあけにする。また、設問番号を解答の番号・記号とをはっきり区別するために、棒線□:::□を使用するのも有効である。

<例1> □□1.  
(1)□:::□イ. □□ク. □□シ.

<例2> □□1.  
(1)□:::□イ. □ク. □シ.

<例3> □□1.  
(1)□イ. □□ク. □□シ.

<例4> □□1.  
(1)□イ. □ク. □シ.

## 2. 解答の訂正の仕方と留意事項

(1) 解答の作成中に誤りに気づいた場合は、マスあけの部分までさかのぼって「∴」の字2マス以上で消し、その後ろを1マスあけて解答を書き直す。書き誤った部分を点筆などで消すのはよくない。やむを得ず点を消すことで訂正しなければならない場合は、消してあることが明瞭になるようにていねいに消す。

(2) 後で解答を見直して訂正する場合は、別の解答用紙に「テイセイ」と見出しを付けて新しい解答を書く。この場合、どこをどのように訂正するのかを、番号・記号等に留意して正確にかつ簡潔・明瞭に記す。

「テイセイ」の解答用紙にも受験番号や氏名など必要事項を忘れずに書く。

「テイセイ」の解答用紙は、解答を提出する際に他の解答用紙の一番上に置くのが望ましい。

(3) 校内などでの簡単な試験問題では、新たな用紙を使わなくても、後段に「テイセイ」と明記して番号・記号等をつけて解答を書けば、前段の誤答は書き直さなくてもよい。採点をする際にも、後段に書かれたものを解答とみなし、前段のものは無視する。

## 5. 宿題や小テストの例

日常的に行われる簡単なテストや宿題などは、簡単な書式にしてもよい。

(1) 問題番号を4マスあけにしないで、2マスあけて問題番号を書き、その後に問題文を書き続けてもよい。

(2) 宿題では、自学自習を促すために解答を探しやすい場所に記して、確認しながら学習できるようにすることも必要である。解答が載った問題集は繰り返しの学習や自主勉強に役立つ。ボランティアに問題集の点訳を依頼する場合などにも、解答を別冊にするのか、各巻末に載せるのか、各問題の近くに載せるのかなど、児童・生徒の使い易さや年度が替わっても使える保存性を考えて指示を出すとうよい。各問題の近くに載せる場合は、問題の末尾の少し離れたところに解答を書いてよいし、単元のまとまりの後に解答を書いておいてもよい。計算ドリルなどは、問題式の＝の後に2～3マス程度あけて答えを書いておくと繰り返しの練習に役立つ。

□ □ ∴ ∴ 1 ∴ □ ∴ 3 4 ∴ ∴ 4 2 ∴ ∴ □ □ □ ∴ 1 4 2 8

## 6. 単位

中学校の学習では単位カッコを必要とする箇所は少ない。数学ではほとんどなく、理科分野においてもわずかである。このことから、すべての単位に単位カッコを使うのではなく、[ g ] などのように角カッコで囲まれて単位を特記している場合などに使い、その他の箇所では一般表記と同じ書き方をする方針に変更された。(2006年度より) また、図や表などスペースに限りがある場合も、単位カッコを使わずに∴を前置して書き表すことができる。

密度は、 $1 \text{ cm}^3$  あたりの質量 [ g ] で表している。

ミッドワ、 ∴ 1 ∴ cm ∴ アタリノ シツリヨー ∴ ∴ g ∴ ∴  
デ アラワシテ イル ∴